

十 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。

年が経巡り、心新たに主の御降誕をお祝いしようとしております。そこに私たちの存在の原点があるとすれば、信仰者として、この一年に如何ほど平和の福音を実現できたかを振り返ることが大切ではないでしょうか。増加するワーキング・プアー、世界到るところで大展開されているテロとの戦い、あらゆる種類の悲惨な情景等々、これらは人間本性の歪んだ内面の反映とされます。これらを眼前にして人の驕りは役立たず、神の愛と謙虚さに心と精神を額ずける用意もまだまだだと思えてなりません。

この一年を振り返って、「正義と平和」等の講演で話したり、『前夜』『神学ダイジェスト』等に寄稿したり、小さな努力は致しました。その一つに四年にわたる共同研究『十五年戦争期の天皇制とキリスト教』（新教出版社）の刊行がありますが、真摯な再検討となったかどうか、自信はありません。五月には胃癌と判り、胃、胆嚢、脾臓の全部とリンパの一部を摘りました。体重、体力ともに落ちましたが、書く意欲も能力も、さほど衰えてはいなく、快方へ向っているのが恵みです。以来、大変深刻な課題にも挑戦しましたし、『私的所有権と構造的暴力の不条理性』（サンパウロ）を来年前期に出して貰えるよう準備中です。これらの外に、「信教の自由」権の確立のため亡父の靖国合祀取消しを昨年八月大阪地裁に提起して、目下進行中ですが、遺族の同意もなしに、政府と一体となって、護国の祭神として祀るのには、人権も何もあったものではありません。しかし、カトリック教会には世紀にわたる負の遺産があり、ようやく第二バチカン公会議で解決をみたのですから、一方的に他人を非難して済む事ではありません。私事ばかり記してしまいました。余白なき余白には、折り返し、近況をお聴きかせ頂けるものと、期待させて頂きます。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。わたしたちはその栄光を見た。  
それは父の独り子としての栄光であって、恵と真理とに満ちていた。

白昼と暗夜の闘いが続きます。しかし、私たちも心を天高く開けば、神のみ恵に満ちていることを実感します。頂いたものを頂かなかったかのような振る舞いをせず、分かち合えることができれば、私たちは、皆、兄弟姉妹、祝された者となります。ですから、

二〇〇七年の御降誕の祝日と新しい二〇〇八年の日々を通して  
私たちが良き使信、民全体に与えられる大きな喜びを告げるために、神からの不思議を見届けに急ごうではありませんか。そして、私たちと私たちの親しい者、そして、何よりも、主における例外なき兄弟姉妹にとって御子キリストが喜びと祝福の絶えざる源となって下さるように、共に祈ろうではありませんか。

二〇〇七年クリスマス、幼子イエスの御前に祈りと真心を込めて